

令和元年5月29日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02543

研究課題名(和文) 受容バイリンガルの言語発達と言語使用

研究課題名(英文) Language development and use by a receptive bilingual

研究代表者

山本 雅代 (YAMAMOTO, Masayo)

関西学院大学・国際学部・教授

研究者番号：40230586

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：研究開始時の研究目的は、産出能力が言語間で極端に不均衡な受容バイリンガル(以後、D)が行う言語混合の特徴や機能を明らかにすることであったが、成長に伴い、Dの言語使用が英語一辺倒となり、言語混合のデータを採集すること自体難しくなった。そこで、当初の目的に調整を加え、(1)D及び母親の言語選択・使用の動的、流動的軌跡を審らかにする、(2)その軌跡を方向づけるものは何かを考察することとした。

データの分析から、言語使用における変化は、Dの成長に伴う生活環境の節目と同調しているらしいこと、また言語使用における変化は、Dのみならず、母親にも生じていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バイリンガルは長年、誤解されてきた：脳に過重な負担がかかり、十分な言語能力を発達させることができな(言語発達が遅い、語彙が乏しい、人格が歪む等)として偏見の対象となってきた。長年、人が使う言語は唯一つであることが当然視されてきた日本では、グローバル化が進み、日常的に、他・多言語話者と接することも増えたものの、今なお、複数言語を習得することは、子どもにとって大きな負担であり、その成長に負の影響を及ぼすと信じて疑わない人々が少なくない。そうした社会の中に残る偏見を払拭することを目指し、学術的な分野から、それが偏見であることを示すことは、社会的に大きな意義のあることと考えている。

研究成果の概要(英文)：At the study's outset, the main purpose was to determine the characteristics and functions of the mixed language uttered by the subject, D, a receptive bilingual whose productive abilities were extremely different between her two languages. As she grew, D gradually used less Japanese, eventually speaking only in English. Relevant data being unobtainable, the research plan was revised. However, the new plan is still consistent with the bigger frame of the study, which is to investigate how this subject used her two languages in the course of growing up. The revised research purposes are: (1) to unveil the dynamic trajectory of how D and her mother select and use the two languages; and (2) to contemplate what forces motivate that active and changing trajectory.

The data analysis suggests that changes in D's language use tracked the changes of her maturation. The mother's language use changed too, in complementation to D's.

研究分野：バイリンガリズム

キーワード：バイリンガル 日本語 英語 異言語間家族 親と子ども 言語習得 言語使用 家庭の言語 社会の言語

1. 研究開始当初の背景

科研費による本研究の開始は10年ほど前の2009年に遡る(但し、データ収集は2008年開始)。全期間を通底する包括的研究目的は、受容バイリンガルの言語習得の過程を追跡、その軌跡を明らかにすることであるが、10年の期間を3期に区切り(第1期2009～2011; 第2期2012～2014+2015; 第3期2015～2017+2018)期毎に個別研究課題を設定し研究を続けてきた。データ収集開始当初、3歳であった研究対象女兒D(以後、D)も、幼少時の兄ほどではないが、年齢相応の日本語をある程度使用できる英語-日本語の初期バイリンガルと称しうる言語能力を発達させつつあった。母親との会話にも、単語レベルながら、日本語を用いることができたが、長ずるに従い、母親の話す日本語はある程度理解している様子が伺えたものの、基本的には英語能力の方が格段に勝った受容バイリンガルとして成長するに至った。

2. 研究の目的

データ収集開始から年を追う毎にDの日本語の産出量は低下の一途を辿り、第3期には、母親の話す日本語はある程度理解している様子ながら、自ら日本語を使用することはほぼ皆無となった。一方、第2期に入る頃から、母親の日本語使用についても減少傾向が生じるという予期せぬ事態が観察されるようになった。こうした変化を反映して、第3期に入る段階での研究目的は、<目的(1)>母親とDの言語選択・使用の動的、流動的軌跡を審らかにし、<目的(2)>その軌跡を方向づけるものを見出さんとするとところとなった。

3. 研究の方法

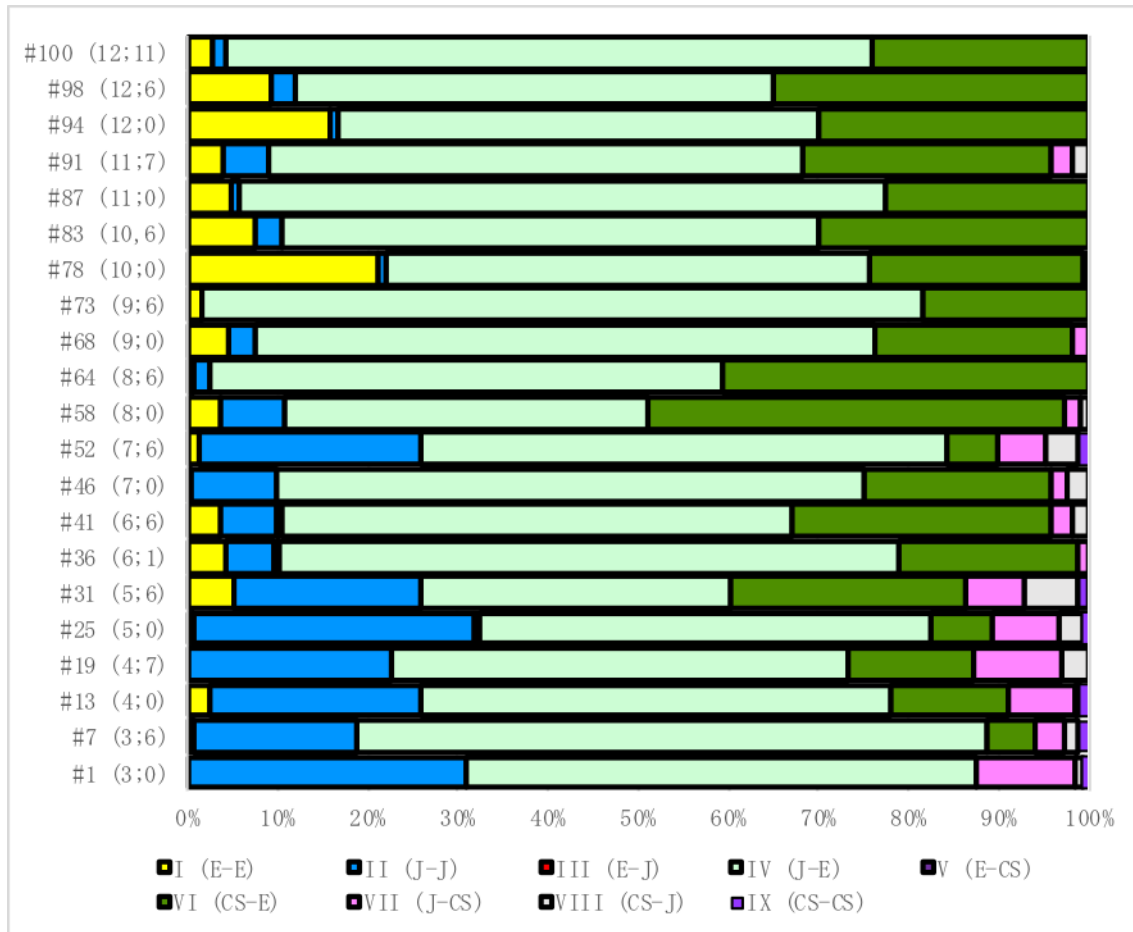
研究の<目的(1)>では、母親とDとの間での言語選択・使用の動的、流動的軌跡を審らかにするために、長期に亘り両者の会話に使用される言語の変遷の軌跡を明らかにし、<目的(2)>その動的、流動的な軌跡を方向づけるものを、面談、質問紙調査の結果や録音データ等に依拠して、見い出さんとするものである。

4. 研究成果

第3期での研究目的の<目的(1)>では、母親とDの間での言語選択・使用の動的、流動的軌跡を、言語の使用状況を数値化し、それをグラフとして視覚的に示した(図1,次ページ参照)。このグラフから、両者の間の言語使用状況の流れが、例えば、就学というようなDを取り巻く言語環境の変化と連関している様子が伺えること、また<目的(2)>では、母親とD両者の、とりわけ母親の言語選択・使用の動的、流動的軌跡を方向づけていると思われるところは、例えばLanza (2004)が主張するような母親の側にある意図的な「談話方略」にあるのではなく、Dを取り巻くその他の要因(ここのケースで言えば、たとえば、Dの言語能力そのもの)が大きな影響を及ぼしているであろうことを、母親との面談やアンケート調査への回答、そして録音データを含めた研究代表者の観察から推測することができる。母親の側にある意図的な「談話方略」も含めて、<目的(2)>については、現在、更なる考察を進めているところであり、結果は留保し、ここでは、<目的(1)>の成果を中心に成果報告を行う。なおこの報告書では、本来ならば、第3期に当たる2015年～2018年における研究成果のみを報告すべきところながら、本研究は長期に亘る縦断研究であるため、これまでの変化の流れを見る必要があり、ここでは第1期から第3期にかけての成果にも言及する。なお以下は、本年度出版が予定されている編書に掲載予定

の研究代表者の論文(山本、2019 予定)の一部と重複する部分があることを断っておく。

図 1：E 家族：約 6 ヶ月ごとの母親-D の言語使用パターンの推移



番号で示されているのは、録音第 X 回目という意味であり、()内の数字は、録音時の D の年齢を示している。[;] の前の数字は年齢を、後の数字は月齢を示している(3;0 は 3 歳 0 ヶ月の意である)。よって下から上に向かって、D の年齢が上がっていることを示しており、グラフの下から上に向かって、母親と D との間の言語使用の経年変化が読み取れる。なお、凡例に示された "E" は English(英語)、"J" は Japanese(日本語)、“CS” は Code-Switching(コードスイッチング)を意味しており、()内の "J" や "E" は誰がその言語を使用しているかを示し、左側は「母親」が、右側は「D」が使用していることを示している。たとえば、#1(3;0)とある一番下の棒グラフは、第 1 回目、すなわち D が 3 歳の時に採録した録音データを分析した結果を示しており、棒グラフの青色の部分【II(J-J)】は母-D 両者が共に日本語を用いて対話していることを示しており、その回の母-D 対話全体の 30%強を占めていることを表している。そして、その右側には薄緑色の棒グラフ【IV(J-E)】が続いているが、これは母親が日本語を用い、D が英語を用いて対話していることを示しており、この回の母-D 対話全体の 60%弱を占めていることがわかる。続いて、桃色の棒グラフが示されているが、これは母親が日本語を、D が英語と日本語のコードスイッチングを用いて、対話していることを示しており、この回の母-D 対話全体の 10%強を占めていることがわかる。

- (1) ここで集計に使用した第 1 回目(#1)から、最終の(#100)までの 6 ヶ月毎 20 回のデータをみると、6 年目前半(#58)(40.36%)を除く全期間を通して、母親が日本語、D が英語を使用する IV(J-E)パターンが最多であることがわかる。このことは、研究当初より D が日本語での発話が少ない受容バイリンガル状態にあったこと、また母親が D に対して、自身ができるだけ日本語を使用することで、その日本語の発達・使用を促したいと望んでいたことから、当初より予想されたことであった。
- (2) そうした D の言語使用の実態と、母親の思いを背景に、母親と D との間の言語使用パターンを時系列で眺めると、そこにある傾向を認めることができる。(1)では、母親と D との間の言語使用パターンのうち最も頻繁に用いられていたのが IV(J-E)であったことを指摘したが、初期の段階では II(J-J)もそれに続いて多かったことを指摘しておく必要がある。それは既述の通り、D が日本語での発話が少なく受容バイリンガル状態にあったことを勘案すると、予想を裏切る言語の使用パターンと言えるからである。しかしながら、採録した発話データを丁寧に見ていくと、ここで日本語として含めているものの多くが、「うん」のような短い返答であったり、直前の母親の日本語の一部を反復したものであったりと、いわば自

主的に言葉を紡いでいくような言語産出行為の結果としての日本語の使用というものは、少しく性質を異にしたものであることに気づく。劣勢言語使用時の発話の停滞を救うために、優勢言語による「穴埋め」が行われるのが常ながら、このJ-Jという言語の使用のあり方は、使用言語が劣勢言語であり、「穴埋め」機能の行使とは考えにくい。むしろ母親の日本語発話に、自身の発話を同調させようとするDの試み・意図の表出としての日本語の使用、すなわち、日本語の「うん」は英語の"yes"と同等の意味内容を持つということを確認する「等交換性の確認行為」を行っているものと解釈できるのではないかと研究代表者は考えている。

- (3) 一方で、母親、Dの両者が英語を使用するI(E-E)は、最初の数年間はほとんど見られなかった。しかし6年目頃より、II(J-J)と入れ替わるように、徐々に増え始め、8年目の後半では減少したものの、8年目の前半では大幅に増えている。それは(1)で言及したように、「自身ができるだけ日本語を使用することで、Dの日本語の発達・使用を促したいと望んでいた」母親が、それまで英語の使用を意図的に控えていたものの、徐々に自身の発話に英語を使用し始めたことが背景にある。この英語の使用の増加は、Dの年齢が高くなり、母親との対話の内容がより複雑になったこともあり、対話者(D)に特定言語(日本語)の使用を促すべく、意図的にその言語を使用するという「象徴的」使用では、Dに意図したことが明快に伝わっているかどうかわからないという懐疑的な状況の下に置かれることになり(母親との面談にて、その点を確認)情報伝達の成立に疑義を感じた母親の実利的対応の結果と推測できる。事実、面談では、母親から、ついつい英語を使ってしまうとの「反省」の弁を聞くことがしばしばであった。

結論に代えて

ここで結論を出すには、未だ考察が十分ではないが、研究全般を3期に分けて見ていくと、各期における特徴と、その時点での言語使用状況(能力)がある程度、見て取れる。ここで、各期における研究成果をまとめることを以て暫定的な結論としたい。なお、第3期における<目的2>に関しては、この後、更に考察を深める。

<第1期>

Dがまだ就学前の幼児であった第1期には、母娘共々相互に比較的高率で日本語(英語との併用CSという形VIIも含めて)を使用していた。たとえ、日常生活において、英語の使用が多かったとしても、録音に際して、母親とDの会話の中に多少なりとも日本語が出てくることから、英語のみに特化された言語状況になってはいないことを示すものと理解できよう。録音データの分析や母親によるメモなどから、それには、1つには、日本語の使用と言っても、対象のDは、当時、まだ年齢が低く、用いる日本語も、具体的な事物に対する呼称、すなわち単語レベルのものや定型のものが中心であり(山本, 2012)、使い易く、理解しやすかったこと;2つには、当時、Dとその兄の祖父母が健在で、祖父母がハワイを訪れる、母親がDとその兄を連れて日本に祖父母を訪ねるといったように、日本語の環境に身を置くことが比較的頻繁にあったこと;3つには、「普段、私や私の親、友達、いろいろな人達が日本語で話をしているのを聞いていて、人が何を言っているのか分からないという状況にそれほど不安を感じないというか、当たり前とその状況のなかにいられる?」<2012.6.12>と母親がコメントしているように、Dは、(少なくとも幼かった頃には)自分が理解できないことに対してさほどの不安や抵抗感を覚えない性格のようであったことなどが背景にあったためと推察される。ただ、それまで家庭で母親と過ごす時間が長かったDも5歳になり、キンダーガーデン¹に入園したことから、英語話者であるキンダーの先生達や同年齢の子ども達と過ごす時間も増え、入園後半年を過ぎた頃には母親との対話においても、I(E-E)やVI(CS-E)が大きく増加し、以前と比較して英語の使用が増えてきた様子がグラフから伺える。また母親にあっても、このDの言語使用における変化と連動したかのごとく、II(J-J)について比較的大きな減少が見られたり、VI(CS-E)のようにCSという言語の使用法に便乗した形で、英語の使用が増加していることも指摘しておく。

<第2期>

翌年の6月からはDが小学校に入学し、さらに英語との接触と使用の必要性が増え、母親との対話におけるDの英語使用が衰える様子は伺えない。例外として、7月6日に採録された#52の録音データには日本語が多く採録されているが、データに添えられた母親のコメントによれば、これは日本訪問中に採録されたものとのことで、母親とDの間では、IV(J-E)が盛んであったものの、同時に日本語使用II(J-J)も非常に活発であったが、それも宜なるかなである。また母親は、日本訪問中、Dの発話に新たな日本語が含まれていたり、日本語に対する驚くほどの理解力を示したりと、思いがけないDの日本語使用状況だったことを報告している。Dが、自分の周辺をとりまく言語環境の影響を大きく受けることを示唆するも

のであった。徐々に進んでいる英語モノリンガル化への移行の最中に観察された、日本語環境下での日本語への一時的回帰現象と見ることもできそうである。母親にとっては、「援軍来たり」の思いであったのではなからうか。

<第3期>

当期に入る頃には、母親と8歳になるDとの対話での使用言語が、日本語から英語を中心としたものに移行していることが明白になった。ここではDの日本語からの英語への移行というよりも---それはすでに第1期のキンダーに入園した頃より徐々に進行していたことであり、新たな展開があったものではない---むしろ母親のそれが徐々に顕著になり始めたということと捉える必要がある。注目に値する。

ここで母親の言語使用に触れておく。母親はIV(J-E)で見られるように、従来通りDが英語を使用しているとしても、自身は日本語を使用していることが多いが、Dの日本語使用がキンダー入園後から顕著に減退するようになると(但し前述の#52は例外)、自身も徐々に英語のみを使用するようになり、第1期から用いられていた形態ながら、日本語とのCSという形態で英語を用いる場面が増加したことには傾注すべきであろう。

Dの日本語使用については、一見すると、Dが、入園や入学という社会的通過儀礼を経験することにより、英語の使用が当然視される社会の成員として、英語を使用することに強く傾斜していき、それがために日本語を使用しなくなったと見ることもできるが、母親の言語使用についても注意深く見ていくと、実は、Dだけが日本語から英語に傾斜したわけではなく、母親についても同様の傾斜が見られることに気づく。このあたりのようすは、母親の次のようなコメントによって察することができる。「確かに忙しさにかまけて、子供と接する時間が日増しに減っているのは事実です。私の日本語での話しかけも日々減ってきているのに気づかされます。日本語で何かを説明したり、質問したりすると嫌がります。分からないから英語で話してほしいと言われてしまいます。」<2013.2.9>

ハワイにおける日本語の社会的な特権的地位を勘案すると、ハワイ在住の英-日異言語間家族の言語観は、マクロ的観点からのいわゆる、優勢言語と非優勢言語という単純な二極対立の関係というよりも、両言語が使用できるバイリンガリズムとなり、通常典型的に生じる非優勢言語話者による優勢言語への言語移行と直結しない形態を見出しうるのではないかと思われもするが、10年に及ぶ言語使用の軌跡を吟味すれば、移行が確実に進行しているのは明白な事実であることがわかる。すなわち、マクロ的観点のみでは拾えない何らかの要因が、言語を実際に使っている人々にかかるミクロレベルでの諸事情の中にあって、影響を及ぼしていると考えが必要がありそうである。

<注>

1: 「キンダーガーデン」とは、小学校入学前の幼稚園に該当するもの。以後、「キンダー」。

<引用文献>

Lanza, E. (2004). *Language mixing in infant bilingualism: A sociolinguistic perspective*, USA: OUP.

山本雅代 (2012). 『科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書』.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1 件)

1. 山本雅代 (2017). 「受容バイリンガルの言語使用と言語環境: 母親の言語使用の経年変化に焦点を絞って」『言語と文化』査読無. 第20号 (pp.17-31). 兵庫: 関西学院大学言語教育研究センター.

[学会発表](計 6 件)(研究会・講演会含む)

1. YAMAMOTO, M. (2018). 'Bilingualism in Japan' "LINGUAPAX ASIA 2018 INTERNATIONAL SYMPOSIUM/リングアパックス・アジア 2018 年国際シンポジウム" (つくば市: 筑波大学つくばキャンパス 大学会館 特別会議場).
2. 山本雅代 (2018). 「バイリンガリズム事始め」『第1言語としてのバイリンガリズム研究会 (BiL1): バイリンガリズム研究と社会の接点』(第17回研究会).(大阪: 関西学院大学梅田キャンパス). 招待講演.
3. 山本雅代 (2017). 「異言語間家族のバイリンガリズム: Dちゃんとお母さんは何語で話している?」『先の見えない現在(今)~人、地域、文化、社会をつなぐ「ことば」を考える』(第3回講演会・連続講演会).(東京: 立教大学・異文化コミュニケーション学部主催). 招待講演.
4. 山本雅代 (2016). 「異言語間家族に育つ子どものバイリンガリズム-社会と家庭を

考察の枠組みに考える」『子どもの日本語教育研究会』(第1回研究会).(京都:京都教育大学). 招待講演.

5. YAMAMOTO, M. (2016). 'Bilingualism: Children growing up in a bilingual milieu' "The 2nd Symposium on bilingualism" (Osaka: Osaka International School of Kwansei Gakuin). Guest lecturer.
6. 山本雅代 (2015). 「二言語環境での親子の対話: 使用言語を制するのは誰か?」『第1言語としてのバイリンガリズム研究会』(第11回研究会).(大阪: 関西学院大学大阪梅田キャンパス). 基調講演.

〔図書〕(計 2 件)

1. 山本雅代, 他 (2019). 『先の見えない今~人、地域、文化、社会をつなぐ「ことば」を考える』. 晃洋書房. ページ数未定 (論文「受容バイリンガルの言語能力と親子間の使用言語の変遷」).
2. 山本雅代, 他 (2016). 『異文化間教育学体系 第3巻 異文化間教育のとらえ直し』. 明石書店. pp.13-27, 179-196, 197-214. (論文「第10章 デフォルトとしてのバイリンガリズム」他).

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号 (8桁):

(2) 研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。